

元禄五年三月三日、芭蕉は複雑な気持ちで桃と桜が咲いている草庵にいた。実は我が愛弟子の嵐雪と其角の二人は芭蕉から少し距離をおき始めていることを薄々承知していた。芭蕉はあえて二人を担ぎ上げ、桃と桜に例えて私の両腕には其角と嵐雪という愛弟子が付いていますよと持ち上げたのである。多分草の餅も食べたことであろう。芭蕉の死後、この二人は江戸俳諧を二分する大家になるのである。

芭蕉が生涯作った句は九百とも千ともいわれていますが、その約十五%が季重なりの句でした。季重なりがうるさくなつて来たのは近年からで、その査証として高野素十、与謝蕪村、高浜虚子、水原秋桜子、内藤鳴雪、日野草城、山口素堂、加藤鞆郎、村上鬼城、上島鬼貫、山口誓子といった江戸から明治期の錚々たる俳人等は堂々と使っていたのである。

芭蕉は奥の細道で 蛤の ふたみにわかれ ゆく秋ぞ と詠っています。蛤は春の季語で行く秋は季重ねです。山口素堂の目には青葉 山ほととぎす 初鰹 は代表的な例としてよく出されます。

季重ねは絶対タブーだと言う訳ではなく、季語ごうしがお互いに助け合い、どちらかの主題がはつきりし補い合っているれば

良しとしています。奥の深い俳句の世界、その判断は素人では難しい技の様です。

ではこの糸萱の石碑を造ったのは何時ごろだろう。茅野市内の代表的な文学碑百二十基は江戸時代後期からで、天保十三（一八四二）年の芭蕉の句が最も古い。しかし洪水で失われ、明治三六年の芭蕉二百回忌に再建されています。茅野市内の芭蕉句碑を時代別に列挙してみましょう。

江戸時代 三基（うち一基は再建）

明治時代 五基（うち三六年が三基）

昭和五年 一基

年代不詳 二基（自然石）

芭蕉没後の二百回忌頃に全国的に芭蕉ブームが起きましたが、糸萱の碑もこの頃であらうと推測するしかありませんでした。と言うのは、このころ糸萱の里でも虚子と繋がりがあり、芭蕉の流れをくむ小平雪人を師として滑川唼社を結成して農作業をしながら句に励む男女が大勢いました。芭蕉を慕う人も当然いたでしょう。

私たちの周辺にはたくさん石碑や道祖神、庚申塔、馬頭観音などがあります。たまには目をむけ歴史を体感するのもいいのではないのでしょうか。たまたま見つけた石の句にあれこれより添ってみました。

（茅野市）